

●第26回村野藤吾賞選考経過

第26回村野藤吾賞選考委員会は2013年3月25日に、谷口吉生、芦原太郎、新谷真人、尾崎勝、西沢立衛の5氏の選考委員により開催された。

今回の選考対象は、村野藤吾記念会会員より推薦のあった以下の23作品であった。

東京スカイツリー（日建設計）、正願寺（堀越英嗣）、PATIO（K邸）（矢板久明+矢板直子）、倉敷中央病院（辻野純徳）、大多喜町役場（千葉学）、カトリック笹丘教会・聖アウグスチノ修道院（村上晶子）、金沢海みらい図書館（堀場弘+工藤和美）、ともだちの森保育園（戸室太一+北田修治）、べにや無何有（竹山聖）、宇土市立宇土小学校（小嶋一浩+赤松佳珠子）、黄檗山萬福寺第二文華殿（森田昌宏）、京都工芸繊維大学60周年記念館（木村博昭ほか）、共愛学園前橋国際大学4号館 KYOAI COMMONS（乾久美子）、フレスコ画のある家（鈴木謙介）、自然体感展望台「六甲枝垂れ」（三分一博志）、竹の会所（陶器浩一）、地中の棲処（末光弘和+末光陽子）、澄心寺庫裏（宮本佳明）、由利本荘市文化交流館 カダレ（新居千秋）、黒谷の家（大角雄三）淡路人形座（遠藤秀平）、日月潭風景管理处（團紀彦）。

（登録番号順）

選考委員会ではまず、クライテリアの確認が行われた。選考基準として、日本建築界に大きな感銘を与えたすぐれた建築作品の設計者ひとりに贈る賞と規定されていること。選考対象は、推薦締め切りの2012年9月末から起算して過去3年以内に完成した建築作品の設計者で、村野藤吾記念会会員および選考委員の推薦によるものであること。過去の受賞歴および独立した建築家であるか組織に属する建築家であるか、自薦他薦の別を問わないことが確認された。

その後、応募添付資料や作品掲載誌を選考委員各自で閲覧し、選考のための議論の対象とすべき作品をひとり3作品を挙げる投票が行われた。投票の結果、東京スカイツリー（日建設計）、正願寺（堀越英嗣）、大多喜町役場（千葉学）、べにや無何有（竹山聖）、宇土市立宇土小学校（小嶋一浩+赤松佳珠子）、自然体感展望台「六甲枝垂れ」（三分一博志）、竹の会所（陶器浩一）、由利本荘市文化交流館 カダレ（新居千秋）、日月潭風景管理处（團紀彦）の9作品が挙げられ、各選考委員は自らが挙げた作品について所見を述べた。

その後の議論は、宇土市立宇土小学校（小嶋一浩+赤松佳珠子）と、竹の会所（陶器浩一）を軸に展開した。作品の評価と共に、村野藤吾賞のクライテリアである「感銘を与えたすぐれた建築作品」の解釈と、村野藤吾賞として相応しいものとは何かについて議論が交わされた。

その結果、宇土市立宇土小学校（小嶋一浩+赤松佳珠子）が、村野藤吾賞に値する建築であるという見解で選考委員全員が一致したため、村野藤吾賞選考委員会として、宇土市立宇土小学校の設計者を第25回村野藤吾賞に推すことを決定した。

宇土市立宇土小学校は、熊本県中央西部の宇土市にある900人近い児童数を抱える大規模小学校。L字型の壁と、深い軒、天井いっぱいまで開く全面開放が可能な折れ戸が特徴。屋内運動場が一体のものとして建築に取り込まれている。L字型の壁が緩やかに空間を規定し、内外が融通無碍につながる平面構成の斬新さと共に、通風の確保や日射の遮蔽にも配慮されており、学校建築という既成概念を超えた建築として建築界に感銘を与えた。